早期臨床実習を終えて

早期臨床実習を終えて

歯学科３年　吉　田　麻　莉

早期臨床実習Ⅱは、１年生の時に行われた早期臨床実習Ⅰとは異なり基礎科目と臨床科目との関連を強く意識した内容で行われた。各診療科における実習と基礎科目の講義が隔週で行われ、実習においても解剖学や歯科理工学などの基礎科目を意識する場面が多くあった。例えば、歯科放射線科ではレントゲンやCTから魚の骨がどこに刺さっているのかを考えた。診断を行うためには、教科書だけでは理解の難しい三次元的な解剖学的位置関係の把握が必要だ。また、基礎科目での講義では研究内容について分かりやすく説明があった。基礎研究が臨床において多くの患者さんに利益をもたらすこと、研究のおかげで歯科医療が進歩していることを改めて認識できた。

２年生、３年生で学ぶ基礎科目は覚えるべきことが膨大で、勉強していても歯科とはあまり関係ないのではないかと感じることが多くあった。そんな中、早期臨床実習Ⅱで基礎や臨床に携わる先生方のお話や治療見学、実習を通して、臨床における基礎科目の重要性を改めて感じることができた。

３年生後期から臨床科目が始まって、基礎科目が大切であったことを改めて感じている。例えば、病理学では組織学で学んだ正常の組織像を知っていないと異常病変が分からないし、病因を理解するには解剖学の知識も必要だ。また、補綴学では咀嚼や嚥下の流れを理解するのに生理学や解剖学の知識が必要だ。基礎科目で学んできたことが繋がってきて面白さと同時に、基礎の定着が不十分であることを痛感する。

早期臨床実習で治療見学を通して、病院に医療を必要としている患者さんが多くいて、特に高齢の方が多いと感じた。食べることは、単に栄養を摂取するだけでなく楽しみの一つでもある。美味しく食べられるように良い補綴装置を作ったり、予防にも積極的に取り組んでう蝕や歯周疾患による歯の喪失を減らし健康の保持増進にも努めたい。まだ書きたらないくらいやりたいことが沢山ある。歯科医療は患者のQOLに大きな影響与える責任ある職種である。このことを心に留め、これからの実習・講義一つ一つに取り組みたいと思う。

早期臨床実習を終えて

歯学科１年　近　藤　裕次郎

早期臨床実習の活動は大きく三つに分かれるが、それぞれに学びがあった。

患者役実習では、６年生の先輩方に自分の歯を診ていただいたが、彼らの対応は既に歯科医師のそれのようであった。中でも感じたのは先輩方との話しやすさ、とりわけ彼らの笑顔の穏やかさだった。自然な笑顔は相手の緊張を緩和し、悩みなどを相談しやすくさせる。これは診療する時に限らず、一般的な対人関係においても当てはまるものであり、日々の生活態度が如実に表れるだろう。５年後には自分も彼らのようになるために、膨大な知識と高いコミュニケーション能力を身に付けていなければならないのだと痛感し、一層身が引き締まった。

患者付き添い実習では、患者さんをユニットに案内した際、先生が親身になって患者さんの予定を聞いたり、治療方針を丁寧に説明する姿を見ることができた。ここでも医療従事者として患者さんと接するには、きちんと意思疏通をして彼らの不安を和らげていくような対応が必要になるだろうと感じた。

治療見学実習では様々な診療科を回ったが、特に口腔外科の見学が印象深い。手術の様子や患者さんの手術後の経過の写真を見せていただいたが、激しい顔面の損傷やそれに対する外科的な処置は、日常からかけ離れたようで衝撃を受けた。しかし、術後経過の写真を順に見ていくとみるみる快方に向かっており、口腔外科医の技術と人間の再生力に驚かされた。一方で、写真から患者さんへの負担が想像以上に大きいことも見受けられた。そのような困難な手術を成功させる技術と集中力を長く持続させる体力も必要であることを学んだ。

早期臨床実習は私にとって初めての経験をすることが非常に多く、医療従事者としての心得の一片に触れることができた。入学したばかりの学生が実際に病院で患者さんと触れ合う機会を得られることに感謝し、勉学、部活共に励んでいきたい。